

資料紹介

天明改正 細見京繪圖

－「い」文字送り火があった時代の京都－

鋤柄 俊夫

本図は、木版三色摺で、大きさが64.2×47.7cmの折りたたみ型絵図である。画面は南北を長辺にした方形で、北の枠外に「御所御門跡」「神社」「寺院」「村名」「名所旧跡」などを、複数の色と記号で示す。類例は、天明3年(1783)刊の正本屋吉兵衛板にあるとされ、作者は「君修」と記される。

全体の構図は、中央西寄りに、秀吉のお土居で囲まれた範囲を配置し、この周りを、北から東を鴨川が、西を紙屋川および桂川が流れる。これは京都が特別な空間であったことを視覚的に示す。

お土居内は、船岡山の麓を源とする堀川が中央西寄りを南下し、一条で賀茂川から分流してきた小川と合流して、二条城と西本願寺の東辺に沿いながら九条でお土居の外へ出る。二条城の正面から高瀬川の舟入につながる二条通を基線とした近世京都の都市構造は、すでに足利健亮氏の指摘するところだが、堀川もまた重要な幹線であったことを示す。また聚楽から北野天満宮を除く千本通以西と鞍馬口通以北が田野であるため、結果的に北の上立売から南の七条と西の二条城から東の鴨川までの京都中心部が画面中央に配置され、さらに画面の中軸線が中世以来の伝統をもつ室町通になっていることをふまえれば、お土居を描いたことによる秀吉時代のイメージにとどまらない京都の空間構造が踏襲されている。

禁裏と二条城を除き画面内で目立つ表現の施設は、東西の本願寺・本圀寺・東寺・相国寺・方広寺・祇園社・建仁寺・妙覚寺・妙蓮寺・本隆寺・大徳寺・妙心寺など洛東と上京に多い。一方これに対して伏見稻荷社・清水寺・金閣寺・銀閣寺などは目立たず、現在の意識との違いを示す。また洛中には藩邸表示も多くみられ、とくに三条以南に集

中している。さらに鴨川に架けられた橋も三条と五条は大型の表現となっており、この地域に人家が密集していたことを推測させる。

一方お土居の外は、南が大池(巨椋池)の南岸にあたる市田と佐古を境とし、東西の端を宇治川と淀川がつなぐ。東端の宇治川左岸には鳳凰飾りをいただいた平等院が描かれ、対する西端の淀川左岸には石清水八幡宮が鎮座する。

西は後鳥羽上皇以来の事蹟を伝える水無瀬川を南端に向日丘陵を北上し、洛西の勝持寺を経て西芳寺・松尾社・渡月橋と桂川右岸を遡る。桂川の北は嵯峨野の天竜寺・二尊院・清滝から高雄を経て愛宕山を望み、大きく離れて鷹峯につながる丹波道に至っている。

北は賀茂川の上流を大きく西へ曲げて描いたため、とくに西端は雲ヶ畑の惟喬神社と岩屋山が、その右手奥に花脊の大悲山峰定寺が描かれるなど歪みが著しい。ただしその東は貴船・鞍馬・市原と続き、さらに高野川上流の寂光院と梶井門跡三千院が描かれる。

東は大原山とも呼ばれる小野山を北端とし、横川・比叡山を経て山中越に達し、その南は大文字山から稲荷山および伏見の城山まで続く山並みと山麓の寺社が並び、さらにその奥に山科の地がおさまる。なお豊国廟の建つ阿弥陀ヶ峰の名は今熊野の七条末に見えず、『京羽二重』と同様に知恩院東の粟田口に見える。

このように見てくると、本図は九条以南と鞍馬口以北の縮尺を著しく縮め、洛西が簡略化された表現になっている点を除けば、東西は実際もおおむね同じ緯線にならぶ宇治と水無瀬川を基点として、西はほぼ真北へ、東は比叡山へ向かって延長した範囲に、必要な情報を適切な位置関係で詳細

に示している点で、高い客観性が認められる地図資料だと言える。

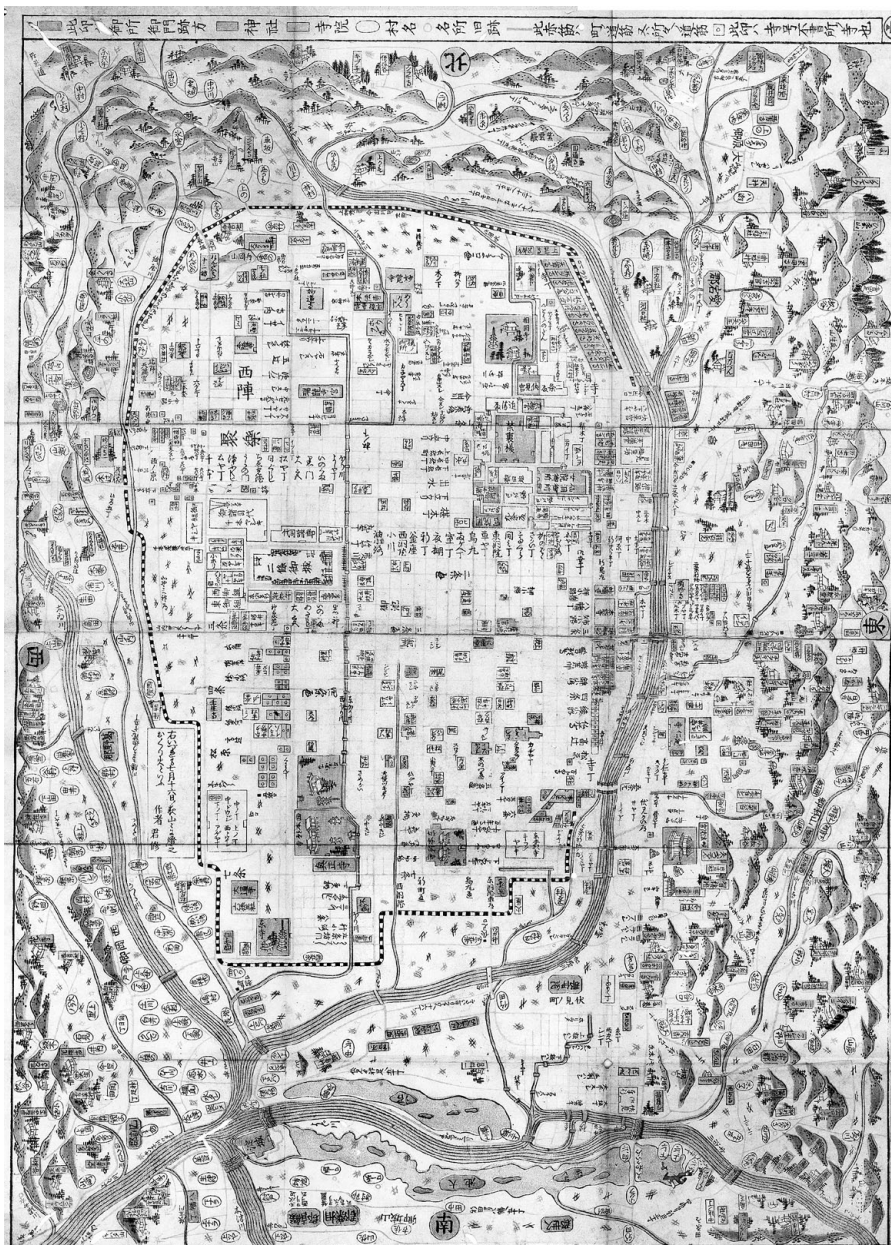
このような京都の江戸時代情報を伝える本図のもう一つの特徴が「北」字の脇に記された「い」文字送り火の存在である。京都の夏を代表する盂蘭盆会の送り火は、現在大文字山をはじめとする五山に象徴されているが、江戸時代には「い」「一」「竹の先に鈴」「蛇」「長刀」などが点されたと伝わる。このうち本図の「い」は、市原で点された、「い」文字を示しており、明治20年8月16日火曜日の日出新聞には「送り火」として如意嶽の大

文字・貴船の船・松ヶ崎の妙法・水尾村の華表などとならび「市原村のいの字」が「点火するよし」とみえる。

大文字送り火の起源については、空海・横川景三・近衛信尹明などの諸説があつて明らかではないが、その過程にも様々な歴史のあったことがわかる。

参考文献

大塚隆 1981『京都圖總目録』 青裳堂書店



天明改正細見京繪圖 (本学部蔵)